

中のニューヨークから沢山の情報や研究資料を送って下さったギャリソン先生、万年青年の吉沢先生、穏やかで優しく、いつも前向きのアッシュウエル先生。そして長年に亘り公私両面において力を貸して下さった事務の横山さん。

進取の気質に富んだ学科の気風と諸先生のご厚情を得て、私も心に老いを感じることもなく、学生指導の傍ら希みに任せた研究も何とか続けることが出来、幸せであったと痛感しております。思い出に溢れ、心の故郷でもある短大英文科に一日も早く新たな道が拓け、飛躍の時が訪れますことを祈念しております。

思い出すこと

滝 静 寿

最近、先生の後姿に何か変化が起っていると感じることもある。しばらくして、ああそうかと納得する。短大での教育・研究生活に終止符を打つ時が迫っているからかも知れない。長ければ長い程、想いは深い。人ごとではない。

私が赴任した時の事が昨日のここのように思い出される。私の短大教員としての運命は、英文科の三大美人教授に拝調することから始った。その三女史とは、竹内先生、山田先生、熊崎先生である。共通点を上げると先ず若々しいこと、優美であり、知的であること等々、相異点は三人三様明確な個性の持主であることである。お雛様の三官女を思い浮べた。私は三段目（三枚目の方が正しい）の五人囃子の一人として舞をまう役目を演じなければならないと覚悟し、それ以来今日に至っている。しかし、山田先生、竹内先生が退任され、此の度は唯一の官女の勤めを全うし、段を降りることになった。二段目不在のもとで舞うことに改めて空しさを感じる。

先生とは、シェイクスピアを中心にエリザベス朝の演劇の研究を共有しており、講義においても先生の『英米文学概論』（主として十九世紀、二十世紀）と私の『英文学史』（主として古英語時代から十九世紀前半まで）を連係して

受け持っており、共通の問題意識と話題に事欠くことなく、その繊細な感覚と含蓄の深さに助けられてきた。学問は素より、一言で表わせば「会うとほっとする」人間味の豊かな人格の持主である。

最も印象深く思い出されるのは、十年位前の昔の事であるが、「古代ギリシャ語を勉強してみませんか?」と言われ、私も即座に「やりましょう、ホメロスの作品に少しでも触れてみたいから」と承知してしまった。早速非常勤講師の先生にお願いし、五限目熊崎研究室で受講することになった。途端に急に心細くなり、丁度その頃私の末娘が在学中であったので、父親の権威を使い、「君もやれよ」と強引に仲間に入れた。父親の頼りなさを知りつくしているので、直ぐ承知してくれて一緒に学習を始めることになった。しかしそれからが大変な事で、先生の勉強熱心と愚娘の若さに翻弄され、結局宿題も忘れて、正に劣等生になってしまい迷惑をかけてばかりの単位未了者で終わった。先生の向学心と何事にも初心にかえって素直に学ぶ姿勢は現在も変わっていない。学生指導においても衆知の通り、学生の声でも証明されるように、素敵な母親か姉のような存在である。

短大の存廃が問題にされている今日、最も大切な宝を失うことは大きな損失である。残念であるがこれも世の運命、感謝の心を込めてお送りせざるを得ない。これからは、御自分で好きなように生き、一層素敵な元教授としての人生を送って戴きたい。先ずは元気で、より長く活躍されん事を祈念してやまない。

一番近い後輩より

お元気で、熊崎先生

岡 本 誠

同僚かつ先輩でいつも身近にしながら、熊崎先生というお名前の響きは私にはどうも昭和の40年代と結びついてしまう。やはり専任となった時期があい前後していたということや、当時まだ小さな所帯だった英文科の家庭的雰囲気

のせいであろう。

小さな所帯といえば大学そのものもまだ本格的な拡大期に入っておらず、御多分にもれずの学園紛争を除けば、まだのんびりしたところがあった。そののんびりしたところというのは大様でもあり、またいい加減でもあった。私なども本来の英文科のみならず、学部の英米文学科の科目や経済や経営といった学生まで担当させられたものである。このときの男子学生で今も付き合いが続いているものが何人かいるのは、この時代の一種の産物と言えよう。また外国語部が発足したのもこの時期である。こちらの面々とは、やれ塩原温泉であるとか伊豆だとか一緒に旅行したものだ。

さて、そういう頃であった。とある渋谷の飲み屋でいつもの呑み助連が気炎を上げていたのは。私はまだ新米教師とておとなしくしていたのであるが、話がだんだんと同僚に及び、そしてまた数少ない女の先生に及んだ。「熊崎先生がいいと思う人、ハイ！」、「今度ドイツ語に入った先生がいいと思う人、ハイ！」。酔っ払い達の他愛もないコンテストながらも、熊崎先生のほうに手がたくさんあがったのを見て私はほっとした。このとき熊崎先生のほうに熱烈に手をあげた一人は「でも、なんであの人は名前に熊なんてつくんだろう?」、と真顔で先生の「グレイスフル」なることと「ベアー」が mismatch であると言わんばかりであった。私は内心、そんなこと言ったってしょうがないじゃないの、と思いつつもその方の嘆きが少し分かる気もした。こういった呑み助先生達も今はほとんど鬼籍に入っておられるか、あるいは入りつつあるので、熊崎先生どうぞお許しあれ。

こういう30年ばかり前のことが一段と懐かしく思い出されるのは、先生がいよいよ定年をお迎えになることにほかならない。しかし先生は定年などまだずっと先のことであるかのようにお見受けする。これからもお元気で私人としての生活を楽しんでいただきたいと思う。2002年晩秋に記す。

熊崎先生を送る言葉

梅原敏弘

熊崎先生に初めてお会いしたのは今から4半世紀前の1977年のことである。当時私は駒澤大学の外国語部非常勤講師となって2年目を迎えていた。おりしも、短大英文科で、専任講師を募集しているから応募してみないかという話があり、英語科の牧野先生にも相談し、応募してみることにした。短大英文科に先輩の熊崎先生がいるから、履歴書を出しに行くようにと言われ、履歴書を持って会いに行くことになった。当時はまだ第一研究館が出来る前で、記憶が定かであれば、短大英文科の先生方は、現在は短大放射線科の実験室になっている7号館の一階にある大部屋風の一室を資料室兼共同研究室として使っていた筈である。履歴書を携えてその研究室兼資料室を訪れると、現れたのは対照的な二人の女の先生だった。一人はやや小柄ながら背筋がぴんと伸び、はきはきとした口調でしゃべり、ご自分の考えをはっきりおっしゃる感じの先生、もう一人は、長身で背筋がすらりと伸びて、かけている眼鏡の向こうに見える眼差しはまさに“柔和”そのものという感じの物腰の穏やかそうな先生であった。前者は当時英文科の主任であった竹内美恵子先生、後者が他ならぬ熊崎先生であった。

その時は、履歴書を渡すとすぐ失礼した。熊崎先生のご尽力により翌年短大英文科の専任講師となることが出来、その後両先生と長くお付き合いすることになったが、初めてお会いした時の両先生の印象は、その後も変わることはなかった。竹内先生は教室会議の席でもはっきりとした口調で自分の考えを述べられ、英文科をリードし、最後には駒澤大学史上初めての女性学部長もつとめられた。一方、熊崎先生も竹内先生の後を受けて主任を長らく勤め、科の運営と発展に貢献するところ大であった。先生は自分の意見を主張して科を率先してリードしていくというより、周りの意見にじっと耳を傾け、それを持ち前の

穏やかな人柄でまとめあげていくことに長けていたように思う。実際、熊崎先生の主任在任期間中、教室会議などで波風が立つことはあまりなく、意見の違いはあっても和気藹々とした科の雰囲気はずっと保たれ続けた。これも先生の穏やかな人柄のなせるわざであったであろう。異例とも言える三期にわたる長い主任生活を送ることになったのも、堅実に問題処理をする優れた実務能力に加えて、先生が敵を作らない穏やかな性格の持主であった事が大きく影響していると思う。

確かに、先生は administrator としても有能であったが、熊崎先生と言うと先ず念頭に思い浮かぶのは、文学を愛し、シェイクスピアを穏やかな口調で語ってやまないシェイクスピアリアンとしての先生の姿である。駒澤大学恒例の法要講演においても先生は「シェイクスピアの蓄財」という題目でシェイクスピアの知られざる側面に光を当てた興味深い講演をされた。淡々と聴衆に語りかける抑制した語り口の背後に、熱い文学に対する先生の思いを感じ取ったのは私だけではなかったであろう。今後こうした先生の姿に接する機会も少なくなってしまうと思うと寂しい限りである。しかし、これからは校務から解放されて、先生もやっとうご自分の時間を十分に持てることとなった。悠悠自適の、読書三昧の生活の中で、今後も文学の世界を思う存分楽しんでいただきたいと願っている。

熊崎先生の思い出

高野秀夫

熊崎先生とは平成元年からお付き合いをさせて頂き、先輩としていろいろ御指導賜り、本当に有難く思っております。

確か先生に初めてお会いしたのは、こちらの英文科にお世話になることが決まり、前もって、ご挨拶に北海道から上京した折でした。その時は岡本先生が主任で、お昼の会議に伺いました。滝先生がみんなをお酒の話で笑わしたこと、

若い女の先生が一人いたこと、ネイティブの英語の先生がいたことをはっきり覚えていますが、熊崎先生の記憶はほとんどありませんでした。

当時は多数の受験生が集まり、まさに大学全盛時代の感がありました。熊崎先生は、まだ在職中の竹内先生とよく資料室で雑談された折、私も時々仲間に入れて頂きました。他の学科にはない外国語特有のユーモアが飛び交うなか、普段から目だつことなく、我が道を行く姿勢を最後まで崩さずに“実用英語”重視の時代が到来しても、マイペースで生きて来られました。

いつもの先生の言動から、学生時代はよく本を読み人生を熟っぽく語った文学少女であったことが窺われます。“最近の学生は、よく本を読まなくなったのが淋しい”と時折、話しておられました。英文学を研究され、特にクリストファー・マーローに生涯を賭けてこられ、英文科の論集「英文学」には、必ずマーローの翻訳を何年も掲載され、近年は、「クリストファー・マーロー戯曲選」を出版し、永年の研究成果として世に問い、マーロー研究の発展に寄与されました。定年後も、是非翻訳を続けられ、論集に載せて頂けることを願っております。以前、大学内の研究発表で、“Marlowe's Mighty Lime”で読み上げる詩の素晴らしさは今でも忘れられません。

英文科の主任が岡本先生から滝先生、梅原先生、モエ先生と変わり、放射線科が駒澤大学の学部になります。バブル景気崩壊後、大学も大きく様変わりするなか、英文科も国文科と共に改組への道が開かれ始めたのも永年駒澤短期大学英文科教授として数多くの難儀を乗り越えてこられた先生の功績は大きい。

長身で、いつもしゃきしゃきとして、時に見せる微笑、やさしい語り口の先生のイメージは、昔も今も変わりません。まだまだ学生に英文学を語るのに充分なほどお元気です。

今迄のご好意に感謝すると共に、今後の先生のご健康と、悠々自適な生活を送られ、好きな英文学の研究を続けられ、ご活躍されることを心よりお祈りいたします。

今後の更なるご活躍を祈って

吉 沢 栄 治 郎

熊崎久子先生に初めてお会いしてから、もう20年になります。姿勢の良い、きりっとした先生、というのが第一印象でした。シャープなところは今日に至るまで変ることなく、そして、何よりも驚かされることはお丈夫なこと。

幸いにも小生はメリハリの利いたご指導をこんにちまでいただいております。悠々と定年を迎えられる先生ですが、また折あるごとに駒澤大学まで足を運んでいただき度いとおもいます。長きにわたるご教導に感謝いたしますとともに、これからのなお一層のご活躍を祈念して攔筆いたします。

熊崎先生との思い出

湯 浅 陽 子

熊崎久子先生と駒澤短大英文科でご一緒させていただいて、私の非常勤講師時代も含めれば23年もの月日が過ぎた。俄かには信じられないでいる。私が初めて非常勤講師として採用していただいたのは昭和54年の4月。その時の英文科主任は、辞令式に出席されていた竹内美恵子先生であったと思う。残念ながら非常勤講師として丸7年勤めているうちに、竹内先生の主任時代が終わってしまったらしく、私の頭の中には竹内先生の主任としての記憶は無い。そ

の代わりに熊崎先生の主任時代のことはよく覚えている。なぜなら、私にとっての主任＝教室会議議長だからである。

昭和61年4月に専任にさせていただいた時、主任をされていたのは熊崎先生であった。その後しばらくその大役を続けておられた。今でもよく覚えているのは、ある英文科教室会議の風景である。他の先生方がお弁当を食べながら会議に加わる中、主任である熊崎先生お一人が、終始お弁当の蓋も開けずお茶も召し上げらずに、空中の一点に焦点を当ててひたすら議事を進めておられた。入ったばかりの私は、まるで傍観者のように「熊崎先生は大変でいらっしゃるな」と思ったものである。

かれこれ8年前の平成6年度末に、竹内先生が定年で退職された。竹内先生は私の父と同世代の方で、容姿とは正反対に男性的な気風を持ち合わせておられたので、いつも何か重要な判断を要する時には頼りにさせていただいた。当時、竹内先生の「退職」の2文字に私は、突然巣離れを通告された、自立するには少々頼りない鳥のような気分になったことを思い出す。そして平成14年度をもって、年の離れたお姉様のような存在と受けとめていた熊崎先生も出てしまわれる現実を目前にして、言いようの無い寂しさを感じずにはいられない。これからは、出講日に学生以外には誰とも言葉を交わさないで帰宅することもあるかもしれない日々が待っている。寂しい。

平成6年度まで、私はどちらかと言うと熊崎先生より竹内先生との結びつきの方が強かったので、竹内先生が出られた後は、どんなふうにも寂しくなるのであろうかと心配したものだ。だが、その心配は全く無用であった。熊崎先生は、年齢的には私の姑と同世代なのにもかかわらず、まるで少女のような純粋な一面をお持ちのうえに、好奇心旺盛で、意外と体力がおりになる。むしろ、熊崎先生の方が私よりずっと若くていらした。お傍にいて楽しく過ごさせていただくうちに、平成6年度以降の8年間があっという間に過ぎ去っていった。竹内先生が退職された後は、短大英文科の中で専任の女性教員は私たち二人しかおらず、しかも相手が私では熊崎先生はさぞかし心もとなく感じられただろうと思う。しかし、そこは良くしたもので、私の非常勤講師時代2年目から英文科事務室勤務になられ、以来長く私たち教員が全幅の信頼を寄せている事務の横山紀世さんが私の力量不足を補ってくださった。何かあれば熊崎、横山、湯浅の女3人トリオでピーチクパーチク、まことに楽しく過ごすことができた8年間であった。

熊崎先生は竹内先生とは別な意味で顔が広い。竹内先生は前述のとおり、

外面とは正反対に、内面は非常に男性的な方だったので、学内の要職を次々とパイオニア的にこなされていったことから、お知り合いが多かった。その竹内先生のすぐ後ろを歩まれるが如く、竹内先生同様、やはり要職をこなされた熊崎先生も顔が広いことには間違いが無かったが、何か違っていた。それは、熊崎先生が内面・外面ともに非常に女性的な一面をお持ちだということによるのかもしれない。

特に、熊崎先生のお人付き合いの手法は、私には真似できないほど外向的で相手を思い遣った、丁寧かつ律儀なものであるように思う。お誘いがあれば余ほどのことが無い限りお断りになることが無い。熊崎先生を卒業後も慕う学生は数多く、事実、教え子の結婚式に招かれることもよくおありのようである。また、何かのきっかけで知り合われた方々と共に、先生の専門外の勉強をされたり、そのお仲間と国内や海外旅行を楽しまれたりと、いつも交友関係の保持に前向きで、精力的に友達を輪を形成しておられる。その付き合いの良さと、人並みはずれたバイタリティー、新聞や本をよくお読みになることに基づく話題の豊富さには、いつも頭が下がるのである。

一方、内向的な女らしさと言うべきか、「家庭や家族」あるいは「食」に対する熊崎先生特有のこだわりというものが、先生はある高い水準の価値観をお持ちである。ご主人のご存命中はよく「マイ・ダーリンが…」というお言葉を聞いた。外食を好まれないご主人のために、教授会などで遅くなる時は予め夕食の準備を、それも私のような手抜きでは無く、ちゃんとイチからご自分でお作りになる手のかかったものを用意されていたようだ。いつだったか、私の子どもがまだ小さかった頃、我が家では教授会の日夕食といえ、朝から作り置きして出て来られる、ハッシュドビーフが定番だった時期があるのだが、その素材のデミグラスソースに缶詰のものを使って即席に作ると話した私に、「あら、手抜きなのね」とおっしゃったことがあったから、先生の「食」に対するこだわりを窺い知ることができたわけである。ご主人亡き後は、朝早くから起きて、お仏壇へのお供えやお花の水遣り、飼っておられる小さな生き物達の食事の世話をし、そして、自分一人のためであっても、きちんとした朝食を作って召し上がるなど、一日の始まりを大変忙しく過ごされていると伺った。やはり一日一日を大切に、質の高いこだわりを持って生きておられるのである。そのようなものを一切持ち合わせぬ私などは、先生の、この筋の通った生き方を見習わなければ…と思う次第である。

熊崎先生は、ご自分は一步下がって常に相手を上に立て、相手の意向を第一

優先に行動しようとされるのでつい見過ごしてしまいそうになるが、実はとても芯の強い、頼りになる方である。これまで幾度となくその強さを感じたことがあった。最も印象的だったのはご主人の最期でお忙しかった時期。また、竹内先生もご一緒に三人で函館へ行った時のことも心に残っている。函館の夜景があまりにきれいなので、夕食後に熊崎先生とホテル内のカクテル・バーに入った。竹内先生は辞退されて二人きりであった。何を話したかは覚えていないのだが、いつも私にお見せになる、控えめにあれやこれやと話しかけてくださる熊崎先生ではなかった。寡黙で、お酒を飲みなれたご様子の、少々近寄りがたい雰囲気漂っていた。この時、先生はいわゆる「素」だったのかもしれない。なぜかとても先生が頼もしく思え、熊崎先生の性格の奥行きを深さを感じた。

熊崎先生の周りにはいつも明るい笑い声が絶えず、お傍にいて居心地の良い暖かな空気が流れていた。楽しかったその良き日々が、4月からは過去のものになるという現実を、果たして私は受けとめることができるのか。今は想像もできずにいるのだが、これまでと同様、学会だ何だかんだと先生を引っ張り出させていただきたいと願っている。先生、今後ともよろしく申し上げます。